

「世界展開力事業参加報告書」

京都大学文学研究科文献文化学専攻インド古典学専修 修士1回生 高橋健二

今回のプログラムでは、ライデン大学で行われたサマースクールで、プラーナ文献講読（宗教聖典『スカンダ＝プラーナ』講読）、古英語言語学、アヴェスター言語学の授業に参加し、またその後で行われた印欧語学会に参加させていただきました。

サマースクールのうち、サンスクリット文献学の授業では、写本をチェックしながらテキストを読み進めていきました。私はこれまで写本をあまりチェックしていなかったのですが、授業を担当された Peter Bisschop 先生は丁寧にいくつかの写本を照合されながら読み進められ、その正確な読解と解釈に感銘をうけ、自らの研究にも写本研究を取り入れたいと考えています。また授業外にも、先生は、私が今行っているテーマ（叙事詩における初期サーンキヤ・ヨーガ研究）を研究されていたこともあり、そのテーマに関する先生のお考えや、サーンキヤ哲学発展史の史観、また取り扱うべき文献などをご教示くださり、私の今後の研究の発展の道筋を与えてくださいました。

また古英語・アヴェスター言語学の授業、および印欧語学会は、私の英語力改善の必要性を感じ、また言語学的手法をさらに深く学ぶことができました。英語に関しては、言語学は私自身の専門とは少し離れており、授業の聞き取りが十分にできないことがあり、またアメリカ人やイギリス人の英語が聞き取れないことがあり、英語のリスニング力の改善の必要性和自分自身の専門分野以外の語彙力の必要性を感じました。また、私は以前から、目の前のテキストについて、印欧祖語からサンスクリットおよび中期インド語への音韻・統語法の変化を言語学的に分析を行ってきましたが、今回その分析方法をさらに深めることができ、また二つの言語（古英語とアヴェスター語）を新たに学んだことによって視野が広がっただけでなく、先生方や参加していた学生とのディスカッションを通じて、言語学的手法そのものの問題点などについても造詣を深めることができました。

また今回のサマースクールでは主にヨーロッパ諸国からさまざまな国籍の学生が集まり、約二週間半の間多くの学生と交流することができました。特にルームメイトのイタリア人の学生の一人とは特に仲良くなり、学問以外にも多くのことを語り合い、また料理などを通じて文化的な交流もすることができました。その他にも多くの先生方や学生と交流し、多くの刺激を受けました。

今後の留学などの計画については未定ですが、英語のコミュニケーション能力の改善の必要性を感じたこともあり、英語圏でより長期の留学を検討中です。また、これは今回の派遣以前から考えていたのですが、これまでは西洋的な研究方法を追求してきましたが、インドの学問研究の伝統も知っておく必要があると思い、ネパールやベナレスなどの伝統的なサンスクリットの教育の場にも行ってみたいと考えています。卒業後の進路については未定ですが、今回海外の多くの研究者や将来研究者を目指す学生たちと交流することができ、研究を進めていくことの魅力を再確認することができました。

(